

解決よりも触発を——不透明な時代の社会学——

大谷大学教授
阿部利洋

皆さん、こんにちは。本学社会科学の阿部と申します。今日は、どうぞよろしくお願いいたします。

私は、南アフリカで二十年ほど現地調査をしてまいりました。最近の十年ほどはカンボジアにも出かけて、そこでも現地調査をするという研究生活を送ってきました。南アフリカの後にカンボジアというのは脈絡がなさそうに思えるのですけれども、研究分野としてはどちらも紛争後の社会、あるいは政治体制が大きく変わった後の社会ということである一つのグループに入っています。そこで比較研究するという研究テーマをたてております。そんなわけで、京都・南アフリカ・カンボジア、この三角形を——あたかもバミューダ・トライアングルにとらわれたかのよう——ぐるぐる周る研究生活を送ってまいりました。海外の出張が多くていいねと言われるのですが、行っているところはいつも同じところなのです。

こうしてアフリカにしょっちゅう行っていますと、「まあ遠いところ、ご苦労さんですね」と言われます。確かに遠いです。先月もシンポジウムの報告で出かけたのですが、飛行機を一回乗り継いで片道二十四時間かかりました。

しかし、「アフリカは遠いですね」と言われるときには、距離だけではなくて、心理的にも遠くて、もつと言えば、今暮らしているこの日本の社会とは接点がないというふうな意味もあるのではないかと思ったりもするのです。それで今日は、一見すると遠いように思えますけれども、こちら側の社会と向こうの社会で、どこか共通する課題に直面しているのではなからうかと、そういうお話を準備してまいりました。

今日のタイトルは「解決よりも触発を―不透明な時代の社会学」と、いかにも大学の先生がつけそうなタイトルをつけております。普段でしたら、私はこの時間、三年生のゼミを担当しております。最近の学生は遠慮がないと言いますか、こういうタイトルをゼミで示しますと、「ちよつとわかりにくいから、もうちよつと別の表現で言ってください」と言われてしまったりします。自分が学生のころは先生が怖くてそんなことは言えませんでした。が、時代は変わりました。それで、どう言い換えればわかりやすいかと考えるわけです。今回のタイトルも考えてみました。それで……あえて「良いボケは良いツツコミを生む」というふうに言ってしまったても大筋では外れてはいないのではないかなと思っております。どういうふうにそのまともに向かって進んでいくのか、これから小一時間、どうぞよろしくお付き合いください。

さて、私は昨年一年間イギリスのオックスフォードへ研究滞在してまいりました。最先端の理論研究をして来いという時間をいただいたのです。私が所属しておりましたのは、社会学部というところです。同じ建物には、犯罪学・経済学、それから国際政治の研究者が集まっていました。

こういう建物でどういう話をするかと言いますと、一年間ずっと話題になっていたことが二つありました。一つは難民問題、もう一つはテロ事件です。**写真1**は昨年秋にテロ事件のあったバリの、共和国広場です。今年の二月の写真なのですが、今でもこうやって追悼する動きが続いています。こういった出来事は、緊急の問題ですので、



写真1 パリの共和国広場 (筆者撮影)

いったいどういう政策的な対応が可能なのかという話がメインになるわけですが、それでも社会学の研究者も多いので、そもそもそういう出来事が起きているのは何故だろうかという話題になります。

難民の人々はどこから来ているのかと言うと、多くはシリア、そしてイラクからです。何故シリアから出てくるのかと言えば、シリアではずっと内戦が続いているからです。まだご記憶の方も多いのではないかと思います。二〇一一年に中東・北アフリカで「アラブの春」という民主化運動が起きました。そのときに、エジプトやリビアやチュニジアは実際に政府が変わってしまったわけなのですが、シリアもその後に続けということで、欧米諸国は反政府勢力を応援しました。けれども、ロシアやイランなど今の政府を支持する国々があり、また反政府勢力側の分裂などもある。今に至るまで内戦が終わっていません。結果として、難民というかたちでシリアから多くの人が外に出てきています。

二〇一一年当時、私も「アラブの春」は良いことなのだ

ろうと素朴に思っていました。しかし当時気づかなかったことは、私たちのように外から見ていると、当時のエジプトのような独裁政権というのは単純に良くない政府だと思ってしまうわけなのですけれども、現地で調査している人たちに訊くと、潜在的なテロリストになるような人たちを治安機関がかなり厳しく取り締まっているので、テロが抑えられている現実もあるということです。けれども「アラブの春」で民主化運動が盛んになったことで、潜在的なテロリストたちも併せて活性化してしまったと。そして「イスラム国」への人の流れが、民主化運動が起った地域からできてしまったということです。これは何なのだろうかと考えました。欧米諸国は民主化運動が起った国を、そういった社会を、支援してコントロールしようとしたわけなのですけれども、結果として予想できていなかった現実を引き起こしてしまっているのではないかという話をしました。

仲の良かったイタリア人の弁護士が「こういう話はあちこちであるんだ」と言いました。彼はシチリア島の出身です。組織犯罪の研究をしていると言うのですけれども、もつと具体的に言えば、シチリアですから映画『ゴッドファーザー』のような世界の研究です。そこで「君はそんなに生データをたくさん持っていて、実は「向こう側」の人間なんじゃないか」と訊いてみたら、「いい線いってるね。でも、ちょっと違うんだ」と返してきた。どういうことかと言うと、彼の一族には、シチリアで反マフィア運動をしている弁護士とか政治家とか、そういう人間が多いのだという話でした。その彼が「マフィアと言うと、今では皆、不法行為や犯罪者を思い浮かべるけれども、昔はそうではなかった。むしろ良い意味すらあったんだ」と言うのです。大胆な人とか誇り高いとか優雅である、あるいは協力関係というか連帯感、そういうニュアンスを持つ言葉だったと。さすがにそこまでは知りません。

ここには先ほどの「アラブの春」の話と似ているニュアンスがあります。マフィアというのは歴史を辿っていくと、シチリアの外の人たち、外の勢力がマフィアを使って、シチリアあるいはイタリアをコントロールしようとし

年表 シチリアの歴史

BC 735	ギリシア人がシチリアを植民地化し始める
BC 400	カルタゴが島の西半分の支配を確立
BC 264	ローマがカルタゴからシチリアを取り返す
AD 410	ヴァンダル王国の支配
493	東ゴート王国の支配下に
535	東ローマ帝国がシチリアを奪還
827	アラブ人（イスラム教徒）に征服される
1061	ノルマン人に征服され、シチリア王国となる ヘブライ語・アラビア語・ラテン語・ギリシア語が公用語に
1194	神聖ローマ皇帝がシチリア王に
1266	フランスのカルロ 1 世に征服される
1282	スペインのペドロ 3 世（アラゴン王）がシチリアを支配
1713	サヴォイア家がシチリア王位を一時的に継承
1720	オーストリア・ハプスブルグ家の支配下に
1734	スペインのブルボン家に征服される
1860	イタリアのガリバルディ率いる千人隊がシチリアを占領、イタリア王国へ統合

た結果、予想外の現実をつくってしまった、そういう過程の産物であることが分かります。

シチリア島を地図で見ると、地中海の真ん中の非常に良い場所にあります。地中海で交易をするにも、あるいは拠点にしてどこかに攻め込むにしても、とても便利な場所にあります。そうして、北アフリカ・スペイン・フランス・オーストリアそれからイタリア半島など、シチリア外部の勢力に目をつけられ、攻め込まれ、支配され続けることになりました（**年表**をご覧ください）。その中で、特にスペインの支配が重要だそうです。スペイン人が来てシチリアを支配します。税金を集めたり、もめ事を仲裁したりするような現地の顔役をつくって、地元のリーダーみたいなものをつくって、それで自分たちは帰ってしまう。この立場の人たちがマフィアと呼ばれるよ

うになりました。だんだんマフィアは勢力を拡大していつて、第二次世界大戦が近づく頃には、イタリアのムッソリーニというファシスト党の政治家が「シチリア・マフィアのようなのが勢力を伸ばしていてけしからん」と目の敵にするくらい影響力を持つようになりました。ムッソリーニは、マフィアよりも激しい暴力を用いて弾圧しました。それでマフィアは壊滅状態に陥って、ニューヨークに逃げて行くわけです。イタリアにいるときは地方の一組織だったのですけれども、ムッソリーニが弾圧して壊滅させたら、アメリカへ行って、もうその何倍も強大なアンダーグラウンドな組織になってしまいました。

この話にはまだ先があります。第二次世界大戦が終わりに近づいたとき、今度はアメリカ軍がイタリアを起点にヨーロッパを北上しようと計画しました。そのときに、アメリカ軍もイタリアのことはよくわからないので、ガイドが必要だということになりました。そこで白羽の矢を立てられたのが、なんとニューヨークにいるシチリア・マフィアでした。彼らは、アメリカ軍のおかげで再びシチリアの地を踏むことができたのです。しかし、戦争が終わるとアメリカ軍が帰ってしまいますから、後に残されるのはマフィア。それから何十年か経つとシチリアの隅々までマフィアが勢力を伸ばすというふうになってしまったと言うのです。

その彼の研究というのは、そこらどのようにして今あるような——比較的安全な観光地としての——シチリアになったのかということ、他国の事例と比較するという内容だったのです。シチリアのことを話すんだと言ったら、「安全になったシチリアにぜひ来てくださいとPRしてくれ」とのことです。

この話に見られるような、社会をコントロールしようとして予想外の結果が生じている実態というのは、確かに歴史上あちこちで見つけることができるように思います。そんな話をしていたわけなのです。

そこで次に、私の番になるわけです。「君はアフリカや東南アジアへ行って紛争後社会の研究をしていると言う

けれども、こういう話を聞いてどう思うか」と尋ねられて、私としても紛争後社会には関連するところがあると思います。

紛争後社会というのは、非常に簡単に申しあげますと、政府にお金がない、いろいろな分野の専門家がいらない、それから道路とかインターネットとかそういう社会的なインフラもボロボロになっている状況にあります。そして、目に見えないけれども、一番厄介なことが、人々が何かを信頼・信用できないという雰囲気蔓延しているということです。政治家も裁判官も警察も信用できない。国連のような外国の組織も信用できない。もっと難しいのは、紛争中というのは密告のようなこともたくさんありましたので、住民同士お互い信用できないという状況が生じていることです。

そうしますと、新しい社会をつくりますので皆さん協力をお願いしますと政府が言っても、諸手を挙げて「協力しましょう」というふうにはなりません。紛争が終わったからと言って、私たちが暮らしている安定社会のような状況がすぐに出現するわけではないのです。しかし、そういう状況でも何らかの社会再建策を打たなくてはいい。そこで、これまで国際社会は大まかに言って次のような二つのシナリオに従って、紛争後社会の再建を後押ししてきました。

①正義の実現と法秩序の確立

②国民和解の達成による紛争予防

①は、比較的わかりやすい話だと思います。裁判をして当時の悪い状況をつくった責任者を社会から取り除きましよう、その後で、残りの皆で協力して秩序を回復しようというシナリオです。

②の方には「国民和解」というキーワードが出てきました。これは、私のような部外者からしますと、紛争の後



写真2 ネルソン・マンデラ

(http://www.nelsonmandelaonline.net/)

ですから「和解」とか「仲直り」という話も十分あるでしょうと思うのですけれども、現地に行くところその反対でして、「これは理想としてはわかる。だけどこの状況でどうやって実現したいのか、逆に教えてほしい」と言われてしまう。現地の人からびつくりされるようなシナリオなのです。それも一理あると思いますのは、紛争が起きているところというのは「A対B」というかたちでの対立ではなくて、実際にはグチャグチャといろいろな対立が複雑に絡みあっている実態があるからなのです。

南アフリカですと、かつて「白人対黒人」という対立があったというふうに思ってしまうがちなのですが——そしてそれは大枠としては間違いではないのですが——、実際には結構複雑な関係が生じていました。白人と言っても、イギリス系の白人とオランダ系の白人が対立をしている。黒人の中でも、ズールー人の人たちはオランダ系の白人の人たちと組んでアパルトヘイトを維持しようとしている。アフリカ人の間でも結構対立があつて、特にアパルトヘイト体制が終わる最後の二年ぐらいは、むしろアフリカ人同士の抗争で命を落とす人の数の方が多かったのです。さらには「カレード」と言われる茶色の肌の人たちもいます。この人たちのアイデンティティも複雑で、多くは古いオランダ語——南アフリカではアフリカーンスと言います——を母語にしてオランダ系の白人と協力しているのですけれども、中にはアフリカ人と組んで抵抗運動をするような人たちもいました。つまり、それぞれのグループが、誰とどのよう to 和解できるのかという点で意見が一致しない。ですから「国民和解」と言うと、理想としては良いけれど、実

際には何をしたらいいのかと逆に質問されるような状況でした。

写真2のおじいさんの顔をどこかで見たという方も多くおられるのではないかと思います。元大統領であったネルソン・マンデラ (Nelson Rolihlahla Mandela, 1918-2013) さんです。いまお話したように、紛争の終わらせ方については、当時さまざまな論争があつて、対立双方に強硬派もくすぶっていたわけですが、彼を中心とする政治勢力の幹部たちは、「それでも国民和解でいこう」というふうに決めたのです。

では実際に何をするかと言いますと——これは政策と言つても、私たち学者の活動と似ているところが結構あるのですが——全国各地に調査員が出かけて行つて、可能な限りいろいろな立場の人から体験の聞き取りをしました。おおよそ二万二千人の被害者から聞き取りをしています。次に、ある程度情報が集まったところで、公聴会というものを開いて、いくつかの証言を地域ごとと共有しようという取り組みを実施しました。これを五年間で三六五回。そして、活動の終わりに分析をして、公式の報告書にまとめて公開しました。私たちが調査研究の最後に論文を書いたり、本を書いて出版したりするような具合です。

写真3はその報告書の公開式典を撮影したものです。右側が、その政府機関の委員長を務めたトゥトゥ (Desmond Mpio Tutu, 1931-) というキリスト教の司教です。左側がマンデラ元大統領。二人ともノーベル平和賞を受賞したカリスマ的な指導者です。世界中でこのシーンは何度も報じられました。ですからこの光景だけを見れば、「国民和解」というのがうまくいったのではないかという印象を持ちたりもするわけなのですけれども、そうではありませんでした。たとえば、この写真のこちら側にある聴衆席には誰が座っていたでしょうか？ 外国から来たジャーナリストや報道関係者はいっぱいいました。けれども、当時の主要な政党の代表者は誰一人来なかった。全員ボイコットしたのです。何故かと言うと、それぞれの政党が主張する見方や考え方がこの報告書には反映されていないじ



写真3 真実和解委員会報告書公開式典
(<http://www.tutufoundationusa.org>)

やないかと不満を申し立てていたのです。

当時、この和解政策に非常に期待していた外国人の研究者たちは、その事態を見て、ひょっとして南アフリカの取り組みは失敗だったのではなからうかという話を始めたりしていました。この式典のスピーチでマンデラ大統領はこういうことを言っていました。「私は、皆さんがこの報告書に対していろいろと不満を持っていることは知っています。でも、報告書をそのままありがたがって受け取るよりは、批判や不満も含めて、この報告書についてみんながもっと自由に議論し合ったら良いと思っていますのです」と。

当時、私はその意味がよくわかりませんでした。研究者の中には「これはうまくいかなかったのではなからうか」と言う人たちも出てきていました。この活動が終了して、もう十数年が経ちますが、いまだにその評価が定まっているとは言えません。ところが昨年、南アフリカに出かけたときに、当時この委員会で調査員をしていた現地のジャーナリストに会ったところ、意外な話をされました。その彼も当時は気づかなかった、予想しなかったようなことが、

ここ最近南アフリカのあちらこちらで目につくようになってきたと言います。どういうことかと言いますと、当時この委員会は非常に期待されていたのですが、現実にはいろいろな制約があつて、なかなかうまくいかないことも多かった。ところが活動が終わって十年ぐらいたった頃から、教会とか大学とかNGO、それから地方自治体のある部署とか、そういった組織の人たちが、当時の委員会が期待されていて、でもできなかったことを、自発的に肩代わりするようになかたちで取り組み始めたと言うのです。これは委員会が計画していなかったし、予定もしていなかったことなので、委員会の効果とか、そういう言い方はできないと思うのだけど、全く無関係でもないだろうし、どう考えたらいいのかなという話をしました。

この背景には一つ思いあたるところがありました。当時その「和解」という言葉は定義されなかったのです。この委員会の設置は国会で決まって法律がつくられて、たとえば「被害者」とか「人権侵害」という言葉は何を意味するのかということが細かく定義されて、その上で活動しておりました。にもかかわらず、大目標である「和解」は、実は最後まで定義されなかったのです。これはミステリーだったわけなのです。大目標である和解の意味を曖昧にしたまま、人々の関心をかきたて、動員し、武力紛争への後退を防ぎつつ、新国民が向かうべき方向性を指し示したやり方は、マンデラ・マジックと呼べるかもしれません。その後、この南アフリカ方式の和解の政策は、東ティモールとか、ペルー、ガーナ、リベリア、シエラレオネ等、あちらこちらで応用されるようになっていったのですが、それでも和解という言葉は一貫して定義されてきていない。今ではある意味戦略的に、目標の表現が定義されない、珍しい政策になっていると思います。

和解を定義しなかったら、これは何なのだということになります。あるいは和解なんかできるのだろうか、いやいやできないだろうと、現地でいろいろな意見が沸き起こるのです。「和解のためにはこういうことをやったらいい

いいじゃないか。でも委員会はできなかった」という話もありました。しかし何年か経つと、結果として委員会とは別のところで、当時できなかったことを肩代わりしようという自発的な動きが出てきているのです。定義しないことで論争が生じ、そこでその言葉の意味や解釈がさまざまに言い交わされた。当時それらは批判のストックでしかなかったのですが、何年かしてそれが「発展させるべき活動のリスト」に性格を変えていった、そういう役割を与えられてきたのではないか、と思うのです。

これをもう少し掘り下げて考えることができます。私のように社会学の授業をしている者にとっては、こういう「曖昧なもの」とか「空白の効用」といったようなものは、わりと馴染みのある発想なのです。社会学の勉強と言いますと、まず統計分析とかフィールドワークで聞き取りの訓練といったところから入るわけなのですけれども、その一方で理論的な蓄積もあります。それは何を狙っているのかと言いますと、一つの考え方としては、人々は自分たちの生きている社会・世界を十分にコントロールすることはできない、しかし人々は常に社会・世界に働きかけるし、そうせざるを得ないところがあります。そんな中で、働きかけによる変化の仕方や期待と結果のずれ方にはある程度のパターンがあるのではないか、という発想に基づいて分析を進めていきます。これには社会学という分野の生い立ちが関わっています。

社会学の歴史は百数十年ぐらいですが、一九世紀の終わりから二〇世紀の初めにかけてヨーロッパで広まっていたのは、ダーウィン (Charles Robert Darwin, 1809-1882) の『進化論』を人間の社会に応用するというような考え方です。つまり適者生存なのですけれども、それは後から振り返れば、たとえば戦争をして勝ったものが適者だったというようになっただけです。何故かと言いますと、戦争で勝つということは、非常に簡単に言うと頭が良いからです。頭が良いから環境に最も適応できていると。何故頭が良いと言えるのかと言うと、優れた兵器をつく

ったから、巧みな戦略を練ったから、相手をよく理解し分析できていたから、その結果、戦いに勝ったではないか、ということになります。それは後からそういうふうに理屈づけができるというだけのことなのですから、そういう考え方が広まっていた。

しかし、本当にそうなのだろうかと言う人たちも出てきます。社会学は、近代という時代、あるいは近代社会が自分のことを反省する、つまり自己認識の産物であるという言い方をされます。この「近代」という言葉は、後ほど姜先生が詳しくご説明されると思うのですが、ここではごく簡単に説明してしましますと、ある普遍的な基準を設けて、人々や社会を計画的につくり変えていくプロセス、そういうふうに見ることもできるのではないかと思います。しかし、人々をつくり変えていく、コントロールできるといふ、実は不十分な見通しに基づいて社会に働きかけをすると、事態はより複雑な方向へ向かってしまったりとか、新たな問題が出てきてしまったりとか、あるいはそもそもコントロールできない何かがある社会を成り立たせているのではないか、そういうことを言う人たちが出てきました。

ここで、社会学的思考がよく見てとれる理論をごく簡単にご紹介したいと思います。エミール・デュルケム (Émile Durkheim, 1858-1917) というフランスの先生が百年ぐらい前に活躍していました。その先生はこういう質問をしました。「人間の歴史を通じて、常に変わらず発達してきたものは何でしょうか?」「常に変わらずに発達してきた」と訊かれていますので、私のような人間は科学技術かなとか、それが個人の権利かなとか、あるいは何か公平な政治制度ではなからうかと思ったりします。しかし、この質問の答えは「人々の相互依存関係が発達してきた」なのです。

もちろん人間は「人々の相互依存関係」というものをコントロールできません。コントロールできないのですが、

こういうどこか曖昧なものの周りをぐるぐる回るようなかたちで人間の社会は成り立っているところがあります。

学生たちから、こういうことを勉強すると何か良いことがあるのですかと訊かれたりするわけですが、「これらの時代、どういう新たな相互依存関係が出てくるのか予想できれば、それぞれの職場でサービスなり商品なりのかたちで応用できるのではないだろうか」と答えたりしております。

それからもう一つは、五十年ほど前にアメリカで活躍をしていたタルコット・パーソンズ (Talcott Parsons, 1902-1979) という先生がおりまして、この人はこんな問いを立てました。「社会システムが持続するための必要条件は何でしょうか？」社会システムと言うとちよつとわかりにくいのですけれども、システムにはいろいろなレベル・大きさのものがありまして、国というのもそうですし、大学という組織もそうです。会社もそうです。もうちよつと小さくなると、学生たちのクラブとかサークルとか、家族というのも社会システムの一つとして位置づけることができます。

「社会システムが長生きする必要条件は何でしょうか？」と訊かれれば、皆さんそれぞれに長い社会経験がおありですから、いろいろ思いつくことがあると思います。パーソンズ先生が示した条件は、まず、組織としての「目標設定」がはっきりしていること。そして、「外部環境への適応」。会社の評判が悪くなってしまうては仕事を続けられなくなりますし、行っているビジネスが合法的ではないと言われたらこれまたアウトです。それから三番目に「適切な内部統合」。例として適材適所を挙げられます。それぞれのメンバーの役割をうまく生かしているかどうか。私もこのくらいまでは何とか答えられそうです。しかし次が難しい。

この先生は、非常に厳密に言葉を定義して厳格に論理を継いでいくのですけれども、四番目に変な表現を出してきます。「潜在的なパターンの維持」という表現が一つ紛れております。たとえば、曰く言いたい愛着があるとか、

組織の中での風通しが良いとか、メンバー同士の非公式のコミュニケーションがうまく行われているとか。他の三つとはちょっと違った表現がとられているのです。

こうした要素は、日々組織が円滑に活動していくために重要なのは言うまでもありません。でも、たとえば組織や社会システムがピンチに陥ったときに、あるいは環境が大きく変わってしまったときに、ますます大きな役割を果たしそうです。「目標設定」や「外部環境への適応」、「適切な内部統合」は、そういう状況で変わってしまう可能性があります。そういうときに、何を梃子にそういうものが軌道修正されるのか。あるいは、普段これらの三つがきっちりしていても、長い目で見て組織が生き残るかどうかは、意外と「潜在的なパターンの維持」が鍵になっているのではないかということなのです。一つだけちょっと変わった条件が入っているのは、むしろそういう曖昧なところが、実は重要な役割を果たしているのではないかということを教えてくれるわけなのです。

私の研究対象であります「国際法廷」について申しあげますと、日本政府が多額の資金供与を行っているカンボジアのクメール・ルージュ特別法廷をはじめとして、いくつもの国際法廷が行われています。国連がバックアップして、国際法を専門とする外国人が来て、厳密な法論理に従って法廷を運営しております。だいたいこういうものは十年ぐらい、あるいはもっと時間がかかるもので、気の遠くなるような細かい審理を積み重ねていきます。ところが、最近問題になっていることの 하나가、法廷が終わると、その社会の状況がまたあと戻りしてしまうということです。国際的に有名な司法の専門家たちがやって来て、その知識や法廷運営のスキルを現地に残していくことが期待されているのですが、必ずしもそうならない。それぞれの国で国際的な司法の水準をみたら裁判を長期間やっても、法にのっとった公正な解決というルールがその社会に根づくかと言えば、期間限定のイベントが終わって、また元通りということになっているのではないのかという批判が出てきているわけです。何故なのでしょう。

先ほどお話ししましたパーソナルな分析の条件で言いますと、「外部環境への適応」と「潜在的なパターンの維持」に問題があるから、ということになりそうです。現地の社会と外国から来る専門家たちの間で、うまく価値観の共有が図れていないと、国際水準の司法というルールも、現地の側から共有すべきものとされません。表向き賛同しているように見えるけれども、法廷が開催されている時期だけ巧みに付き合えばよい形式とみなされてしまうのです。こうしたダブル・スタンダードが生じていることは、法廷組織という社会システムが外部環境へ適応していない実態を示しているわけですが、もっと言うと現地社会が法廷組織にとって明らかな「外部環境」になっている時点で問題があるわけです。では何故そうなってしまうのかと考えると、「潜在的なパターンの維持」に問題があるのだらう、という視点に至ります。ある意味、外国から来た司法のエリートたちの間でのみ、国際法廷を取り巻く社会システムの「潜在的なパターンの維持」が図られている、という皮肉な一面も指摘されています。

先ほどのマンデラ・マジックではありませんが、複雑かつ変化する社会の様相を把握するときに、このように何か曖昧なものの効用であるとか、あるいは一筋縄ではいかない逆説のようなものをどこまで把握できるかが重要だ、という視点も、社会学を勉強していてわかってくることなのです。

ここまできて、紛争後社会の話、それから社会学の観点がそれにどう関係しているのかというのはわかったけれども、こちら側の社会との接点がどこにあるのか、その辺がまだ説明されていない、と思われるかもしれません。これから最後にそういう内容に入っていきたいわけなのですが、と言っても、ごく簡単に二つのエピソードをご紹介しますつもりでおります。広告、それからバーチャリアリティ、その二つです。

広告とは、非常に簡単に申しあげますと、ある商品やサービスの情報をなるべく多くの受け手の間で、肯定的に受け止めてもらうことをねらう活動ということになります。古典的な広告は「この商品はこんなに良いものなんで

すよ」というかたちで、その良さを直接的にアピールします。他には「これが良いものだとはわかっているんだけど、買うかどうか迷うなあ」という人の背中をピンポイントで押すような広告があります。今、広告制作の現場では、意見もセンスも全然違う多様な人たちにアピールするような広告をどうやってつくろうかと、そんな工夫がされたりしているようです。テレビのCMを見てみると、三十秒や一分の短い時間に、笑わせたりびっくりさせたり、実にいろいろな工夫を詰め込んでいて感心させられます。そこでは、専門的な表現で言うところの「よく練られた曖昧さ」でもって制作されたCMも多くなっているようです。

その手の広告の中で典型的なものを一つ見つけました。これは六十秒のCMですが、四十秒のところまでご覧下さい。もう四十秒経っているのに、これがどの会社の何の広告かということがまだわからない、そんなCMです。マラソン大会が行われています。どうも先頭集団からかなり離れた人たちが走っています。マラソン大会というのは、給水とか警備とか清掃など、それから沿道で応援する人も含めて、いろいろな人たちのサポートがあって初めて可能になるイベントなわけなのですけれども、これだけ後ろのグループになってしまくと、もう誰も注目していません。道路にも、前の人たちが捨てていった紙コップが散らばっているし、ベビーカーが横切って行ってしまう、そんな具合になっています。

では、続きをご覧くださいましょう——最後にやっと、有名スポーツ用品メーカーのマークと例のキャッチコピーが出てきました。作品の解説をするのは野暮なのであえて省きたいところですが……運動が得意でない人にも——つまり誰にとっても——その人だけが目にするのでできる風景があるというメッセージが描かれています。私は、必ずしもこのCMが優れたCMだということを持ってきたわけではありません。むしろ、この広告をみた人たちが「マラソンもいいかな、やってみようかな」と興味を持って、スポーツ用品店に出かけて行って、そのメー

カーの靴を手にとります、で、値段を見て、静かに棚に戻して、隣の別のメーカーの靴を買って帰ってしまう、といったことも、実は多いのではないかと思いますのです。それでも、広告制作に携わる人たちは敢えてこういうCMをつくって放映している。そこに注目できるのではないかと思いますって持ってきた次第です。

次にバーチャルリアリティなのですけれども、これは特にこれからの社会を部分的に予想する話になるかもしれません。

バーチャルリアリティは「仮想現実」と訳されます。ですから、コンピュータゲームみたいな人工的な世界を詳しく細かくつくり込んで、その中に、使う人を入れ込むようなイメージでとらえてしまったりします。たまた私の知り合いにバーチャルリアリティの装置をつくっている研究者がいて、この話を訊いてみたら、そうではないと言うのです。ゴーグルのような装置を頭にくっつけたり、コードを体にくっつけたりして、いろいろな刺激を与えるのですが、人間の体というのは、どれだけ詳しく調べて、手の込んだ装置を丁寧につくっても、直接コミュニケーションしている状況とは違ったものだという認知をどこかで保っていると言うのです。どこまでいってもそのギャップが残るのだと。

けれども、たとえばゴーグルをつけて、その中のスクリーン上をお花畑が移動していて、自分の座っている椅子がゴトゴトと動いたりする。すると、自分がお花畑の横を車で走っているんだなと思ったりする。その「思う」というのが大事なのだと言うのですね。どういうことかと言いますと、先ほども申しあげましたように、人間の身体はどんな装置をもってきて、手の込んだ刺激を与えたとしても、それは本物ではないと認知している。けれども、身体の側からその不十分な情報を補うようなかたちで、いわば「身体が想像力を働かせる」——私は文系の人間なのでこういう表現をしても勘弁してもらえと思うのですが——ことがあるのです。バーチャルリアリティの体験

が臨場感を伴って立ち現れる瞬間です。ですから、良い装置を開発するには、現実に関わりなく近い刺激を与えるものをつくるという方向よりも、むしろ人間の身体から自発的な想像力をどれだけ引き出せる仕掛けを工夫できるか、それがポイントになるのだと、そんな話をしてくれたのです。

ここまでいろいろご紹介してきました例というのは、本質的にはコントロールできない現実に関わりかけをしていなくてはならないという要請に対して、どのように答えていたでしょうか。マンデラ・マジックや広告、バーチャルリアリティなどいくつかお示ししましたけれども、それは特別な曖昧さを設けて、それによって、関わる人間の自発性とか想像力とか創造性みたいなものを引き出そうとするという共通点があったのではないかと思うわけなのです。ここには、あらかじめ期待されるゴールに向けて——つまりゴールに着けば解決ということなのですが——働きかける対象をコントロールするという発想とは違うものであることが見てとれます。また、何か新しいものを差し出すというより、相手から何かを引き出そうとするわけです。自発性であったり、創造性であったり。

もともと大学教育というのも、こういう営みなのではないかと思ったりするのです。学生のやる気を引き出せば、後はどんどん学生自身で追求していくわけなのですから、それがなかなか難しい。そこでも、今日始めにお話しました、「良いボケは良いツツコミを生む」というのが良いヒントになっているのではないのかなと考えたりしております。

長い時間、ご清聴ありがとうございました。